

生誕、療養時代 大原文学の芽生え

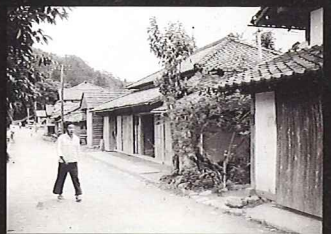
大正元年（1912）
ふるさと本山での療養生活と創作の日々。
大原文学の芽生え。



自宅療養中の富枝



吉野第一尋常高等小学校



上京するまでの12年間、療養と創作の日々を過ごした吉野村汗見の家



高知女子師範学校全景



吉野村寺家の村道にて
左より富枝(3歳)、母・米(30歳)、姉・雪(7歳)、
異父兄・蒼樹(12歳)



自宅にて(23歳)



師範学校1年生の夏休み



雑誌「令女界」に投稿し入賞した
「姉のプレゼント」



昭和13年上半期の芥川賞候補作品
「祝出征」[文藝首都]昭和13年3月号

大原富枝略年譜

大正元年（1912）

九月二十八日、高知県長岡郡吉野村寺家の次女。父は吉野第一尋常小学校校長。四歳年上姉雪。

大正十一年（1922） 十歳

六月二日、母米死去。

この頃から作文の面白さを知り、父の蔵書の古典文学に親し始める。

昭和二年（1927） 十五歳

四月、高知県女子師範学校に入学。

昭和五年（1930） 十八歳

六月、師範学校四年生の学期、物理教室で咯血し入院。退院後、吉野村汗見の自宅で十年近い療養生活に入る。

昭和七年（1932） 二十歳

一年間の自宅療養で小康状態に。初めて投稿した「姉のプレゼント」が「令女界」五月号に入選。

昭和十年（1935） 二十三歳

「時雨」は短歌五首が神近市子主宰「婦人文藝」に、短編小説「氷雨」が入選。

昭和十年（1936） 二十四歳

保高德蔵主宰の「文藝首都」四月号に「溪間」七月号に「おもへや」十一月号に「十五歳」が入選。選者は広津和郎。

昭和十二年（1937） 二十五歳

「文藝首都」同人に推薦される。

昭和十三年（1938） 二十六歳

「祝出征」を「文藝首都」三月号に発表、同年上半期の芥川賞候補となる。

昭和十六年（1941） 二十九歳

創作に専念するため上京。

昭和十八年（1943） 三十一歳

七月、初の作品集「祝出征」を新民書房より刊行。「若き溪間」が「改造」の新人募集佳作に入選、八月号に掲載される。

昭和十九年（1944） 三十二歳

二月、帰郷。野中婉の書簡を写すため高知県立図書館に通い、「婉という女」の構想が生れる。

昭和二十年（1945） 三十三歳

二月、空襲しきりの中、新宿区戸塚に転居。四月十三日の空襲で隣家まで焼失するが、奇跡的に焼け残る。八月、同地で終戦を迎える。

昭和二十年（1946） 三十四歳

「秋砧」婉女物語を「新文学」九月、十月合併号に発表。十月、短編集「三番桶」を全国書房より刊行。

昭和二十二年（1947） 三十五歳

一月、敗血症で倒れる。四月、病後の療養を兼ねて都下久留米村東久留米に父と共に転居。

昭和二十五年（1950） 三十八歳

六月、杉並区和田本町の新築した家に父と共に転居。以後、住居の本拠は同地を動かす。

昭和三十年（1955） 四十三歳

健康を損ね、病氣再発。病床で「ストマイ」つばし「第七感界の囚人」を少しずつ書きつぐ。

昭和三十年（1956） 四十四歳

九月、「ストマイ」つばし「第七感界の囚人」を「文藝」に発表。

昭和三十三年（1957） 四十五歳

二月、「ストマイ」つばし「第七感界の囚人」により第八回女流文学者賞を受賞。四月、短編集「ストマイ」つばし「第七感界の囚人」を角川書店より刊行。同月十二日、父亀次郎、心筋梗塞により急逝。

昭和三十五年（1960） 四十八歳

「婉という女」を「群像」三月号に発表。四月は単行本として講談社より刊行。十一月、同題名でテレビドラマ化して放映。

昭和三十八年（1963） 五十一歳

六月、日本文藝家協会代表として中国作家同盟の招待により中国訪問。

昭和四十年（1965） 五十三歳

二月、「おあんさま」を「中央公論」に発表。九月、日本文藝家協会代表として、ソビエト作家同盟の招待によりソビエト訪問。その後ヨーロッパ各地を巡り、十月末帰国。

昭和四十五年（1970） 五十八歳

一月、「於雪」土佐一條家の崩壊を中央公論社より刊行。同書で第九回女流文学賞

上京と出逢い 代表作「婉という女」

昭和十六年（1941）

結核と闘いながらも執筆を続け、初期の代表作と言われる「婉という女」発表までの苦難の道のり。



「婉という女」第13回野間文芸賞受賞 野間会長より表彰(昭和35年12月)



東京都久留米村の自宅書斎で



林芙美子からの書簡



野中婉から谷泰山に送った手紙



昭和29年初めて飼った愛犬ラディと



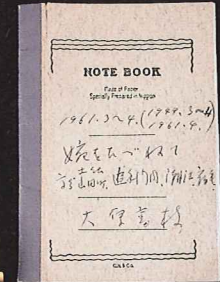
和田本町に新築した家(昭和25年6月)



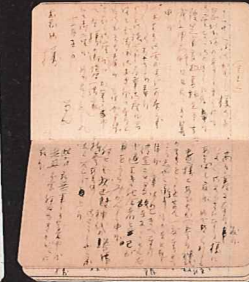
「ストマイ」つばし「第七感界の囚人」の出版・第八回女流文学者賞受賞祝賀会(昭和32年6月)



「婉という女」の生原稿



取材ノート「婉をたづねて」



「婉の手帳」野中婉の手紙を書き写したノート

